

※事務局注釈

**本資料はこれまでの議論を踏まえ、伊藤委員に作成
いただいた叩き台であり、議事要旨も併せて参照くだ
さい。**

データエンジニアの立ち位置モデル

- データエンジニアの範囲（What / How）は「A：システムの種類」と「B：開発スタイル」の2軸で決定
 - 「C：運営方式」はCoE所属となる。ただし「D：データマネジメント成熟度」によって、支援の在り方（Where / Whom）が変化する

データ活用系（DWH/BI/AIなど）

システムエンジニア

データエンジニア

成熟度 0 ～ 2 :
- PJ単位で伴走支援
成熟度 3 ～ 5 :
- 複数PJ / 全社横断で支援

システムエンジニア

領域として
該当なし

基幹系（ERPなど）

データエンジニアに求められる役割

E：事業規模

→単一・複数事業問わず対応できる

F：役割方向性

→アーキテクト／スチュワードと連携する技術実装者として、
意味定義・構造設計に関する会話ができる

G：ビジネス成熟度

→業務改善／顧客価値創造のいずれでも、
目的の視座に合わせたコミュニケーションができる

H：データ活用成熟度

→アドホック／恒常のいずれでも対応できる

I：顧客層

→BtoB／BtoCいずれも対応できる
(BtoCでは特にスケーラビリティに対応)

J：活動階層

→戦略～オペレーションの橋渡しができる
(構造と実装をつなぐ)

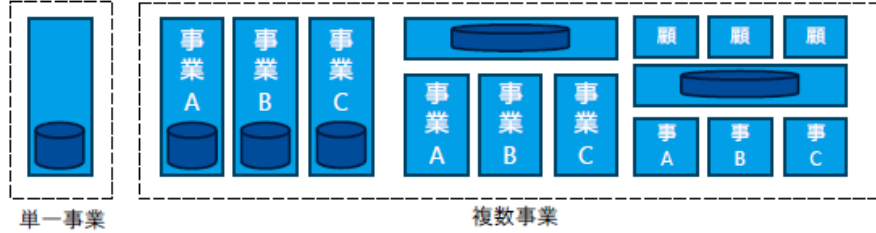
ウォーター
フォール

アジャイル

C,D,E,F,G,Hのイメージ

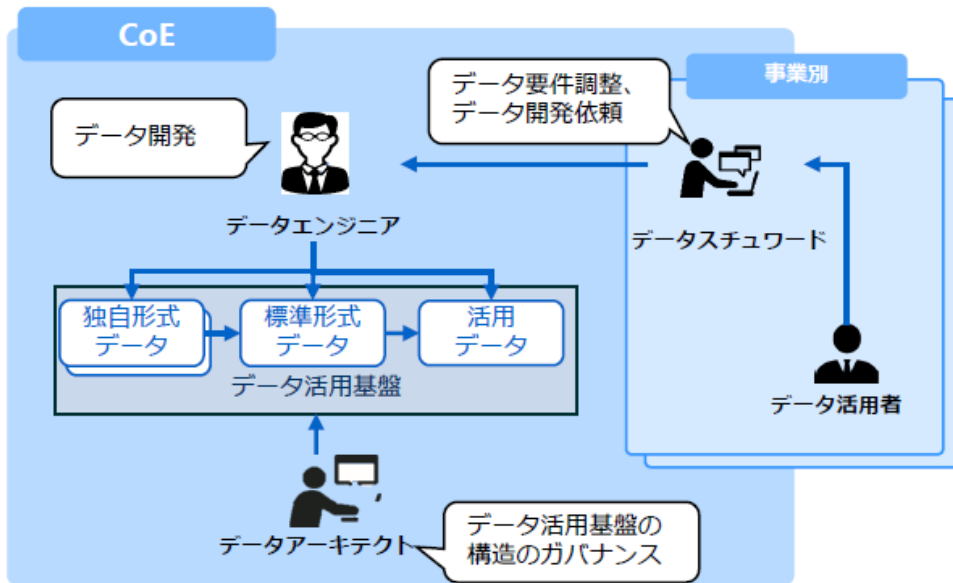
E: 事業規模

単一・複数事業問わず対応できる



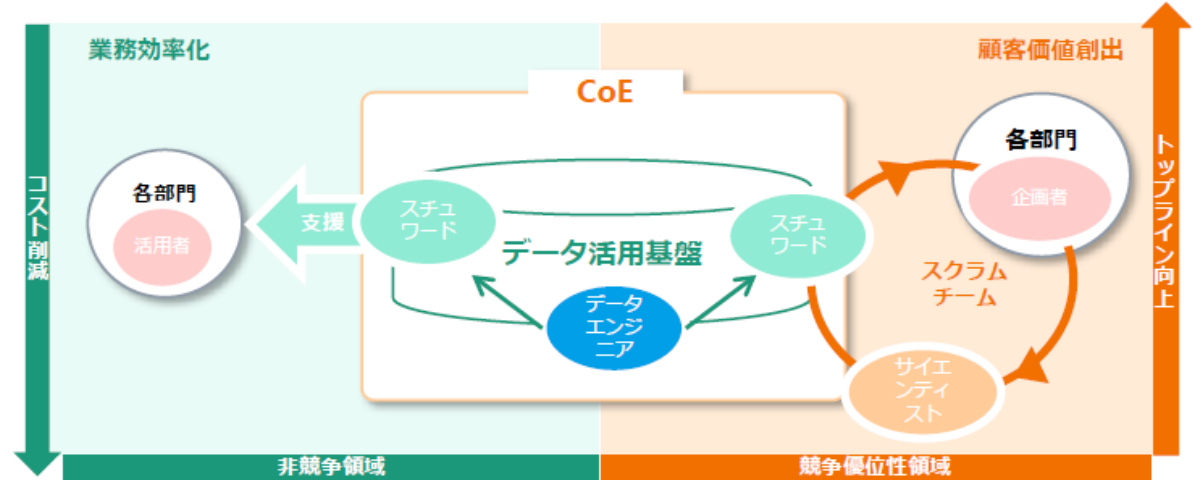
F: 役割方向性

アーキテクト/スチュワードと連携する技術実装者として、意味定義・構造設計に関する会話ができる



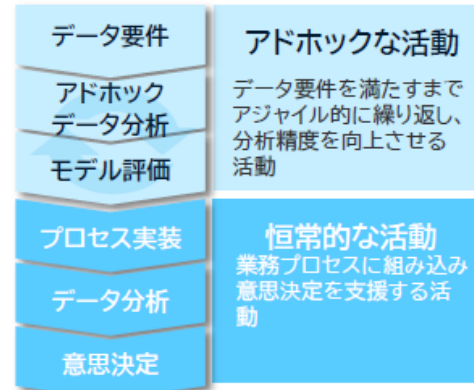
G: ビジネス成熟度

業務改善/顧客価値創造のいずれでも、目的の視座に合わせたコミュニケーションができる



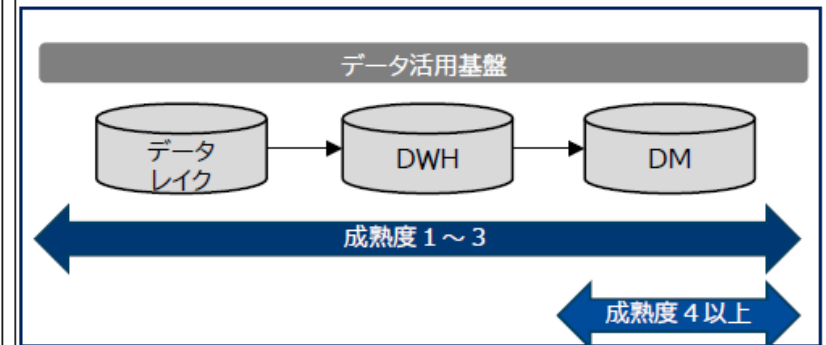
H: データ活用成熟度

アドホック/恒常のいずれでも対応できる



「D: データマネジメント成熟度」

CoE所属だが、成熟度によって支援の在り方（Where / Whom）が変化する



軸		観点	観点分類
A	システムの種類	基幹系システム vs 活用系システム	範囲を決める観点
B	開発スタイル	ウォーターフォール vs アジャイル	範囲を決める観点
C	運営方式	CoE（横断支援） vs CoE（張り付き支援）	組織の関わり方を決める観点
D	データマネジメント成熟度	レベル3以下 vs レベル4以上	組織の関わり方を決める観点
E	事業規模	単一事業vs複数事業	コミュニケーションの観点
F	役割方向性	アーキテクト vs スチュワード	コミュニケーションの観点
G	ビジネス成熟度（目的）	業務改善 vs 顧客価値創造	コミュニケーションの観点
H	データ活用成熟度	アドホック vs 恒常	コミュニケーションの観点
I	顧客層	BtoB vs BtoC	コミュニケーションの観点
J	活動階層	ストラテジー vs オペレーション	コミュニケーションの観点

データエンジニアのスキル

【A,B. 技術・実装スキル】

※What・Howに直接関係するスキル（作る・動かすスキル）

分野	具体的なスキル・知識の例
ETL設計・実装	データの抽出・変換・ロード（SQL、Pythonなど）
データパイプライン	ワークフロー管理
DWH・データ基盤	DWHの構築・運用
データモデリング	スター/スノーflakeスキーマ、正規化・非正規化
品質・監視	データ検証・ログ管理・テスト自動化など

【C,D. 関わり方のスキル】

※Where・Whomに関係するスキル（CoE所属の横断支援型になるほど必要になる）

分野	具体的なスキル・知識の例
共通処理・モジュール化	ジョブや変換処理の汎用化・標準化
メタデータ活用	データカタログ連携、スキーマ管理
再利用設計	ロジックの汎用設計・テンプレート化
データライフサイクル	データライフサイクル、バージョン管理、変更影響把握

【E,F,G,H,I,J. 関係者とのコミュニケーションスキル】

分野	具体的なスキル・知識の例
データ構造の読解力	エンティティ関係、階層構造、マスタ・トランザクション識別
業務知識の理解	顧客・取引・契約・製品などドメイン構造の把握
共通理解形成の補助	ファシリテーション力
他職種との連携力	アーキテクト/スチュワードとの共通言語理解

データエンジニアの直接的な範囲（A・B）

